

# 絵本の読み聞かせ：日英両言語併用の可能性を探る

糸 井 江 美

## The Possibility of Using Both Languages (Japanese and English) for Reading Stories to Children

Emi Itoi

Reading picture books in English have become popular as a way of teaching English to children in Japan. This paper discusses some attractive features of picture books and issues about utilizing them for Japanese children.

The paper also reports some merits and demerits of reading picture books using both Japanese and English by two readers and suggests that it is important to provide more systematic guidance to teachers; not only those who wish to incorporate stories into their teaching practice of English, but also those who wish to practice skills of reading stories in English.

### はじめに

最近、日本では児童英語教育への関心が高まると同時に、英語絵本の活用に関心が向けられるようになった。例えばリーパー（2003）の『えほんで楽しむ英語の世界』<sup>1)</sup>では、多くの英語絵本を使った具体的なアクティビティーが紹介されている。Authenticな洋書絵本は単なる英語教材を超えた魅力に溢れているが、洋書であるがゆえに、私たちが日本で子どもたちに読み聞かせる場合は、入手方法、選書、読み方などで考

慮すべきことがいくつか考えられる。

本小論では、まず絵本の一般的な魅力を簡潔に述べたあと、英語絵本の入手方法、選書、読み方の問題点をいくつか指摘する。そして、実際に絵本を日本語と英語の両言語を使い幼児に読み聞かせた活動結果から、新しい英語絵本の読み聞かせの可能性を検討する。今回は保育園や公共施設などで大勢の子どもたちに読み聞かせる場合に限定して議論を進めていく。家庭での絵本の読み聞かせは、親子コミュニケーションを豊かにする意味でも大変重要であり、英語絵本を読み聞かせている家庭や英語で子育てをしている人たちも少数ながら存在するが、それに関する議論は別の機会に譲りたい。

### 絵本の特徴と魅力

子どもの成長に絵本の果たす役割が重要であることは、これまでも多くの研究者や教育関係者が報告している<sup>(2)</sup>。絵本はさらに親や教師など大人が子どもに読み聞かせることによって、言語的な情報を子どもに伝えるだけにとどまらず、読み手と聞き手の間に両方向のコミュニケーションの機会を提供する。その結果、子どもの情緒的な発達を促し、社会的な能力を育むことが期待される。また、絵本の最大の魅力のひとつはその絵にあるといえる。絵本の絵は、言葉以上の情報を子どもたちに与え、情報を分析する能力を養う役割を担う<sup>(3)</sup>。

さらに、絵本の魅力は、絵本が一冊でひとつの世界を形成していることにある。子どもたちは絵本が伝える物語の中に入り込み、想像を広げることで、物語の世界を自分のものとして間接的に経験を深めていく。

絵本の物語の一般的な構成は、最初に場面設定がなされ、登場人物が紹介されることから始まり、そしてある出来事が起こると、それが時間の経過とともに発展していき、多くの場合、最後には問題が解決するよ

うになっている。時間とともに発展していく出来事には、同じフレーズの繰り返しが使われることが多い。例えば、“*Goldilocks and the Three Bears*”<sup>(4)</sup>では、少女が熊の留守宅に侵入し、お父さん熊、お母さん熊、赤ちゃん熊の椅子、おかゆ、ベッドを次々に試す場面が登場する。そこで、“This is too big,” “This is too small,” “This is just right.”などのフレーズが繰り返される。このような同じフレーズの繰り返しや韻をふんだ文章は子どもの耳にとって心地よく響き、フレーズを丸ごと覚え、音を聞き分ける耳の訓練にも適しており、後に子どもが文字に出会ったときに読む力を育てる手助けになると言われている（リーパー, 2003, p55)<sup>(1)</sup>。

そのような物語では、読み手（聞き手）を惹きつけるために、作者は特別な思いを込めて言葉を選択している。そのため、韻を踏んだものやオノマトペなど音を大事にしたものを多用する他にも、ナンセンスな言葉を創造したり、子どものレベルには少し難しすぎると思われる言葉も使用されたりしていることがある。しかし、分かりやすい話の展開、繰り返される表現、読み手の感情（抑揚、表情）など、理解を助ける多くの要素から子どもたちは意味を理解することができ、それが語彙力をつけることにつながっていく（Cameron, 2001, p163)<sup>(5)</sup>。

### 英語絵本の読み聞かせとその問題点

保育園、幼稚園、小学校、図書館、公民館などで多くの園児や児童の前に、英語絵本の読み聞かせを行う場合、最初の問題点は、英語絵本の入手の難しさである。洋書コーナーが充実している書店や図書館が近くにない場合は、出版社のホームページを見て注文したり、ネット上の本屋で購入したりすることになる。米国、イギリスなどで作成された絵本を紹介するウェブページでも推薦絵本のリストを探すことは可能だ<sup>(6)</sup>。

しかし、絵本の場合は実際に手に取り、絵本全体を隅々まで見てから購入を決めたいものである。中川（2003）の著書、『絵本は小さな美術館』の記述にあるように<sup>17)</sup>、視覚表現性が一冊の絵本全体にあると考えると、インターネットでその一部を除き見ただけでの購入は、失敗することの覚悟も必要だろう。

書評などを参考にしたい場合は、英語絵本に特化したものではないが、平凡社が2003年から毎年発行している雑誌、『この絵本が好き！』や同じく平凡社の別冊太陽絵本シリーズには国内外の絵本が美しい写真とともに数多く紹介されており参考になる。その他にもクレヨンハウス発行の月刊雑誌「クーヨン」や白泉社の「MOE」、また、絵本専門店のリーフレットなどである程度の情報を得ることができる。

どんなにすばらしい物語でも、それら全てが言葉を学ぶという点ですぐれた教材になるとは限らない。内容が子どもたちの発達段階に合っていることが必要であり、子どもたちが興味を持てるものであり、そして読み手にとっても興味を持てるものである必要がある。また、話の展開が分かりやすく、結論にオチやどんでん返しがあるものが理想的だ。

絵本作者が伝えたいテーマも重要である。そこには作者の物事に対する態度、思想、価値観が表現されているからだ。私は絵本を通して子どもたちに他者（他人や異文化）を理解し受け入れることの大切さ、環境や平和の大切さ、そして自分自身を受け入れ、命を大切にすることを学んで欲しいと思っている。しかし残念なことに、特に名作とされる昔の物語には、残酷な場面や女性や黒人などを差別的に取り扱っている表現などが見受けられる。そういう絵本は扱わないのか、あえて取り上げて子どもたちに問題意識を持たせるのかは、読み手の判断に任せられるところだろう。ただ、古典だから全てすばらしいだろうと、無意識に絵本を選ぶことは避けたいものだ。

次に考えなくてはならないのは、だれにどんな本を読むのかである。事前に子どもたちの年齢や人数が分かっており、比較的同じ年齢層のグループに読み聞かせる場合まだ準備が簡単だが、年齢差の大きいグループに読む場合やその時にならないと年齢層が分からない場合は臨機応変に対応できる準備が必要となる。日本語で絵本を読み聞かせる場合にも同じことが言えるが、英語絵本の選書で特に気をつけなくてはならないのは、英語の難しさ、内容の難しさ、子どもの発達段階の釣り合いである。つまり、英語が分からないだろうからと高学年グループに幼児向けの簡単な英語絵本を選んでしまうと、内容が発達段階に合わず興味を示さない可能性がある。また逆に英語自体は短く簡単だが、その内容は奥が深く高学年向けといえる絵本もある（例：“*Yol Yes!*”）<sup>(8)</sup>。失敗を避けるには、とにかく英語絵本をたくさん読み、知識や経験を積んでいくしかない。

4つ目の問題点は読み手の英語力と表現力である。リーパー(2003)<sup>(11)</sup>は、発音がだめだとか、英語が苦手だとかは気にせずに、子どもと一緒に勉強するつもりで積極的に英語絵本を読むことを薦めている。しかし、これが当てはまるのは、あくまでも親子間のことであり、公共施設などで大勢の子どもを前に英語絵本を読むにはある程度の英語力と表現力が必要となる。日本では古くは紙芝居というストーリーテラーの活躍した時代があり、現在はボランティアで絵本の読み聞かせをしている団体も多く、中には藤田浩子のように有名なストーリーテラーも存在する<sup>(9)</sup>。

英語絵本の読み聞かせになると、英語教育関係の学会などのワークショップで絵本の活用の仕方がよく取り上げられているが、体系的に英語で読み方を習える機会が日本では少なく、それに関する情報は乏しい状態だといえる。今後は、英語教育のための活用方法だけでなく、英語絵本のもっと幅広い活用方法や、発声、発音などを含む技術的な面を学

べる機会が増えることが望ましい。英語を母語とする少数のストーリーテラーが日本では活躍しているが<sup>10)</sup>、そういう人たちに学ぶ機会がない日本人は、みずからネットワークを広げ、情報交換をして学んでいく機会を見つけていく必要があるだろう。

### 日英両言語併用読み聞かせの実践

英語で絵本を読む場合、子どもたちがどの程度内容を理解しているのが、読み手としては気になるところだ。子どもたちは、意味の理解を助ける絵や、明確な物語の展開、繰り返し登場する言葉、読み手の表情、しぐさなどから大意を掴むことができる。しかし、より確実に意味を理解させ、「わからない」というストレスがない状態で英語の音やリズムを感じさせるにはどうすればよいのだろうか。さらに、母語である日本語の力も子どもたちにつけさせたいと考え、日本語を英語絵本の読み聞かせに積極的に使ってみる可能性が考えられる。絵本の読み手が、子どもたちに英語と日本語の二言語を比較できるような機会を与えることにより、子どもたちは、言語の面白さや不思議さに気づき、言語というものの自体により興味を持つ可能性も考えられる。

以上のことを鑑み、意味を確実に理解させ、日本語と英語を比較できる読み方としては、以下の2通りの方法が考えられる：1. 日本語で充分知り尽くしている物語を英語で読み聞かせることで、それぞれの物語のきめ台詞を子どもたちは比較することができる（例：『三匹のこぶた』“Not by the hair on my chinny chin chin.”）。この場合は、英語で絵本を読む直前に日本語で一回読むことも考えられるし、数日前に読んだ本、あるいはすでに繰り返し聞いたことがあるのでよく内容を理解している物語を選ぶことも考えられる。この読み方では、物語の展開がスムーズに流れ、子どもたちが集中して聞いていられる利点がある。また読み手

が一人なので、読み手のペースで聞き手とコミュニケーションが取りやすい。2. 英語と日本語の絵本をそれぞれ用意し、二人で1ページずつ、あるいは一文ずつ交互に読む。この読み方では、日本語と英語の音やリズムを比較しながら絵本を楽しめるという利点がある。とくに、オノマトペや韻を踏んだフレーズの繰り返しを両言語で比較することができるおもしろさがある。欠点としては、本を読むのに必要な時間が倍になること、子どもの反応に読み手二人の内のどちらがどのタイミングで応えるかが難しくなることが考えられる。今夏、実際に絵本を日本語と英語で読む実践から、新しい絵本の読み聞かせを模索することにした。今回は、2番目にあげた方法を使い、保育園児を前に一文ずつ日英交互で読み聞かせを行った。英語と日本語のどちらを先に読むかを悩んだが、まず日本語で理解したことを英語で聞いたほうが子どもたちのところに余裕が生まれるだろうという判断で日英の順番とした。

### 読み聞かせ実施の場

今回、絵本の読み聞かせを行ったのは、埼玉県比企郡ときがわ町立玉川保育園である。ときがわ町は埼玉県の北西部に位置し、高齢化の進む山村ではあるが、玉川保育園は明るい木製の園舎や広く自然豊かな園庭に恵まれ、現在100名以上の園児が通園している。2006年8月時点で、乳児10名、3歳児30名、4歳児34名、5歳児36名が在籍していた。

園長との事前打ち合わせで、読み聞かせをする日程、時間を決め、園児とのコミュニケーションのとり方などについて助言を受けた。園長からの助言で特に印象的だったのは、分かりやすい言葉で、研究の目的、ビデオで撮影する理由を園児に話し協力を得た方がよいということだった。実際、その助言に従い説明すると、突然現れた我々を子どもたちは歓迎してくれ、スムーズに読み聞かせに入ることができた。保護者には、

読み聞かせをする目的、個人情報保護について明記した手紙を圈を通じて渡してもらった。日本語での読み聞かせは、地域で絵本の読み聞かせ活動をしている奥山氏に依頼し、私は英語での読み聞かせを行った。

読み聞かせは2006年8月から10月までの3ヶ月間を使用し、およそ週1回の頻度で実施した。その間に、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスのそれぞれに約45分間の読み聞かせを3回ずつ行うことができた。

## 選書

今回、日本語での読み聞かせを担当した奥山氏とは、選書の段階から意見を交換し、発達段階に合った内容で、短い繰り返しのフレーズが出てくる絵本を選んだ（資料参照）。3歳児には、特にひとつの文章が短く、繰り返しの多い、身近な話題であることを基準に、せなけいこ著の『あーんあん』、安西水丸著の『がたんごとん がたんごとん』など、4歳児には、エリック・カール著の絵本を中心にし（『はらべこあおむし』『できるかな』『どこへいくの？ ともだちにあいに！』など）、5歳児には、家族や友だちをテーマに『ね、ほくのともだちになって！』、『あおくときいろちゃん』、『しゃっくりがいこつ』、『きょうはみんなでクマがりだ』などを選んだ。

## 読み合わせ

日本語で出版されたものが英語に訳されているもの（『あーんあん』、『がたんごとん がたんごとん』）、英語でもともと出版されたものが日本語に訳されたもの、英語と日本語の両方で書かれているもの（『どこへいくの？ ともだちにあいに！』）などがあるが、日本語と英語の本の訳にずれがある場合も多く、不自然にならないように訳を足したり省



いたりする工夫が必要であった。また本のもち方、ページをめくるタイミング、読み方（抑揚や声の大きさ）などをなるべく二人で合わせるような練習を繰り返し行った。

### 読み聞かせの実施

3歳児、4歳児、5歳児クラスの順番で、それぞれ3回の読み聞かせを行った。年齢差は、その集中力、反応の違いに大きく現れた。3歳児では、指を吸いながら眠そうにしている子、あくびを繰り返す子、脚をぶらぶらさせ落ち着きのない子、物語とは関係ないことを話しかけてくる子などが何人かいたが、概しておとなしく聞いており、一冊読み終わると拍手をし、「おもしろかった」「もう一回読んで」という感想が何人かから返ってきた。4歳児、5歳児と年齢が上がるほど、集中度は増し、話の展開を予想したり、読み手の言葉を繰り返したりすることが増えてきた。数字などは英語と一緒に数えることができ、多くの5歳児はいくつかの動物の名前を英語で言うこともできた。

子どもたちが主に繰り返したフレーズは、『あーんあん』の中の子どもの泣き声（わー、わー、あーんあん）、『おつきさまこんばんは』の（こんばんは）、『がたんごとん がたんごとん』の（chug, chug, がたん、ごとん）、『はらぺこあおむし』の（Apple, hungry, イチゴ, one, two, three four, five, 葉っぱ, ちょうちょ）、『できるかな』の（できる、できる）、『カンガルーの子どもにもかあさんいるの？』で（いるよ、いるよ）、『きょうはみんなでクマがりだ』の（びゅーびゅー）であった。ここでは、読み手が発した言葉をそのまま繰り返すものと、質問に答える形で繰り返すものが見られた（例：『できるかな』）。

また、子どもたちが興奮気味に、積極的に参加してくる本は、動作や推論することを要求する本で、例えば『できるかな』であったり、逃げ

た金魚を探す『きんぎょがにげた』、次のページに登場する動物を推測する『ね、ぼくのともだちになって!』であった。

子どもたちは感じたことを体を動かすことや言葉に出すことで表現する。そういった絵本への反応を示すことは、とても大切なことで、それにより自分の感情を表現する力がつき、気に入った言葉やフレーズを繰り返すことでそれらの語彙や表現を身に付けることができる。

しかし、日英の両言語を使った今回の絵本の読み聞かせでは、子どもたちの反応からいくつかの問題点にも気が付いた。まず、物理的な問題として、『できるかな』のような体を動かすことを要求するような絵本では、子どもたちが動ける十分なスペースが必要であること。そして、あまりにも興奮してしまうと、読み手の声がかき消されてしまい、先に進めなくなることだ。今回は、特に日本語で「できるかな?」の後に英語で“Can you do it?”と続くのだが、英語の質問を待たずに子どもたちは「できるよ」「できるよ」と騒ぎ出してしまった。二つ目の問題点は、日本では絵本を静かに聞くように教育の場でしつけられていることである。今回の読み聞かせでもしばしば保育士が静かに聴くようにと子どもたちに注意を与えることがあった。藤田(1999, p78)によるとアメリカでは聞き手が相槌を打ったり、歌を歌ったり、鳴き声や動作と一緒にする参加型の読み聞かせが盛んである。日本でも話し手と聞き手が協同して絵本を楽しめるような参加型が広まることでもっと絵本の読み聞かせが楽しい活動になると思われる。3つ目の問題点は、前述の参加型の読み聞かせに関係しているが、今回二人で読んだため、子どもの反応にどちらがどういうタイミングで応えるかが難しかったことだ。二人で読むのは今回が初めての経験であったことも原因の一つであるが、一人で読んでいる場合は、話の進め方をコントロールし易いが、二人の場合は子どもに向き合うことよりも、もう一人の読み手と合わせることを優先

してしまう傾向があった。

### 日英両語を使った絵本読み聞かせの可能性

最後に日英両語を使用した絵本の読み聞かせの可能性を論じる。今回の実践を通して、両言語で一文ずつ読むメリットとして、両言語の音やリズムの比較ができること、意味が分かっている状態で英語を聞くことで子どものストレスが少ないことが上げられる。しかし、前述のように、二人で読むことによって、子どもの反応に 대응するタイミングが難しくなること、時間が長くかかり子どもの集中力がなくなること、一文ずつ読むことで物語のスムーズな流れが中断されることが懸念された。以上の問題点を考えると、日英両語で一文ずつ読む場合は、両言語の音やリズムの比較を主眼に置き、韻をふんだ短いフレーズが繰り返して出てくる本を選ぶことが大切だ。物語の流れを考え、子どもたちの参加型読み聞かせを行う場合は、日本語ですでによく知っている物語を選び、英語だけで読むか、先に日本語で一通り読んでから英語で読む方法が考えられる。

今回の読み聞かせ実践では、日英両言語で一文ずつ読む方法を取ったが、英語に触れたことがない子どもたちに、ストレス無く英語に触れさせる絵本の読み方としては有効だと考えられる。今後も日本語を積極的に使いながら、英語の楽しさも教えられるような読み方をさらに工夫していきたい。

### おわりに

本小論では、英語絵本の読み聞かせに関するいくつかの問題点を述べ、日英両言語併用による絵本の読み聞かせ実践を試みた結果から、そのメリット、デメリットを論じ、新しい絵本の読み聞かせの可能性を示唆した。子どもの言語的、情緒的、社会的成長に果たす役割が大きい絵本

であるが、英語が分からない日本の幼児や児童にどのような絵本を選び、どう読み聞かせるかは難しい問題である。二人の読み手によって、英語と日本語で書かれた二冊の絵本を一文ずつ読む方法では、話の流れが中断され、読み聞かせの時間が倍になる問題点や、二人の読み手で息を合わせる難しさなどがあるが、英語の意味が分からないというストレスが子どもにかからず、子どもたちが両言語の響きやリズムの違いに気づくことが期待できる。

しかしながら、今後、実証研究につなげていくためには多くの課題が残された。まず、何を目的として英語絵本を幼児や児童に読み聞かせるのか、という根本的な問題に立ち返り、選書、読み聞かせ方法を再考する必要がある。日英両言語を使った読み聞かせの効果（英語への興味、語彙の獲得、リズムやイントネーションの違いに気づくなど）を論じるためには、長期に渡って読み聞かせの実践を行い、子どもたちを観察し、データ収集を行う必要があり、そのための方法論やデータを分析し論証するための理論的枠組みが重要となってくる。今後も読み聞かせの実践を継続しながら、これらの課題にも将来は取り組みたいと思う。

また、日本ではまだ一般的ではない聞き手参加型の読み聞かせも取り入れていき、選書に必要な知識、経験、そして英語で読み聞かせる技術を習得していきたい。英語に限らず多様な言語での絵本読み聞かせ活動が今後日本で盛んになり、絵本を通して子どもたちの世界がさらに豊かに広がることを願っている。

参考文献、注記

- (1) リーパー・すみ子 (2003) 『えほんで楽しむ英語の世界』 一声社
- (2) 国府田晶子 (2004) 「絵本と対話による『読み書き能力』の育成：JSL教育を必要とする定住型児童を対象に」『早稲田大学日本語教育研究』 5、pp61-75.  
角田巖 (2003) 「子どもと絵本における相互主観性の成り立ち」『人間科学研究』 25、pp53-62.
- (3) 三森ゆりか (2002) 『絵本で育てる情報分析力——論理的に考える力を引き出す』 一声社
- (4) *Goldilocks and the Three Bears* (1996) Jan Brett
- (5) Cameron, L. (2001) *Teaching Language to Young Learners*. Cambridge University Press
- (6) Children's Literature: <http://www.childrenslit.com/>
- (7) 中川素子 (2003) 『絵本は小さな美術館』 平凡社
- (8) Chris Raschka, *Yo! Yes?* (1993), Orchard Books
- (9) 藤田浩子 (1996) 『おはなしおばさんの小道具』 一声社  
フラン・ストーリングス (1999) 藤田浩子と「かたれやまんばの会」訳、『英語と日本語で語るフランと浩子おはなしの本』 一声社
- (10) Charles Kowalski : 東海大学 : Storytelling for Language Teachers

資料：読み聞かせに使用した絵本

3歳児

【いやだいやだ】(せなけいこ) 福音館 (I don't want to!: Keiko Sena) R. I. C. Publications

【きんぎょがにげた】(五味太郎) 福音館 (Where's the Fish?: Taro Gomi) R. I. C. Publications

【いないいないばあ】(松谷みよ子) 童心社 (Peek-a-Boo: Miyoko Matsutani) R. I. C. Publications

【ふうせんねこ】(せなけいこ) 福音館 (Balloon Cat: Keiko Sena) R. I. C. Publications

【あーんあん】(せなけいこ) 福音館 (Wah Wah: Keiko Sena) R. I. C. Publications

【ねないこだれだ】(せなけいこ) 福音館 (Don't want to go to bed?: Keiko Sena) R. I. C. Publications

【ぞうくんのさんぽ】

【おつきさまこんばんは】(林明子) 福音館 (Good Evening, Dear Moon: Akiko Hayashi) R. I. C. Publications

【ね、ほくのともだちになって!】(エリック・カール) 偕成社  
(Do you want to be my friend?: Eric Carle) Philomel

【がたんごとん がたんごとん】(安西水丸) 福音館

4歳児

【はらぺこあおむし】(エリック・カール著、もりひさし訳) 偕成社 (The very hungry caterpillar: Eric Carle) Philomel

【あーんあん】

【できるかな】

【ぞうくんのさんぽ】

【きんぎょがにげた】

【どこへいくの？ ともだちにあいに！】（いわむらかずお）童心社  
(Where are you going? To see my friend!: Eric Carle)

【カンガルーの子どもにもかあさんいるの？】（エリック・カール著、さ  
のようこ訳）偕成社 (Does kangaroo have a mother, too?: Eric  
Carle) Harper Trophy

【ねないこだれだ】

【きょうはみんなでクマがりだ】(We are going on a bear hunt: re-  
played by Vivian French, from the book by Michael Rosen and  
Helen Oxenbury) Walker Books

## 5歳児

【ぞうくんのさんぽ】

【はらぺこあおむし】

【できるかな】(From Head to Toe: Eric Carle) Harper Trophy

【くまさんくまさん なにみてるの？】（エリック・カール絵、ビル・マー  
チン文）偕成社 (Brown Bear, Brown Bear, What do you see?:  
Bill Martin Jr / Eric Carle) Henry Holt

【ね、ほくのともだちになって！】

【あおくんときいろちゃん】（レオ・レオーニ作、藤田圭雄訳）至光社  
(little blue and little yellow: Leo Lionni) Harper Trophy

【きょうはみんなでくまがりだ】（マイケル・ローゼン再話、ヘレン・オ  
クセンバリー絵、山口文生訳）評論社

【しゃっくりがいこつ】

【どこへいくの？ ともだちにあいに！】

【くまさんくまさん なにみてるの？】

【ね、ほくのともだちになって！】